



知求群会
馬ねぶた大賞



県立木造高等学校



登山ばやし保存会



NPO法人あいうえおの会



林学区チーム



躍動感あふれる馬ねぶた出陣 勇壮に練り歩くパレード

馬ねぶた製作大賞
落中馬っこ愛好会



上町ねぶた会



上町子ども会育成会

つがる市最大の祭り「馬市まつり」が8月28日から3日間の日程で開催され、商工会館前を主会場に多彩な催し物を来場者らは楽しみました。

木造地区では1903（明治36）年から馬の祭り市が始まり、東北三大馬市に数えられる「馬市」が開催されてきました。1975（昭和50）年からは、新田開発に尽くし亡くなった馬の霊を慰めようと「馬市まつり」が毎年行なわれています。

30日は祭りのメインイベントである「馬ねぶたパレード」が行われ、馬ねぶた20台、仮装12チーム、踊り14チームの約1200人が参加し、中心街を練り歩きました。

迫力ある馬ねぶたに続き、各チームが趣向を凝らした仮装や華麗な踊りを披露すると、沿道の観衆からは盛んな拍手を浴びていました。

栄えある馬ねぶた大賞を受賞したのは知求群会、踊り大賞には東北農政局津軽農業水利事務所、仮装大賞には出野里獅子踊保存会、馬ねぶた製作大賞には落中馬っこ愛好会が輝きました。

夜には、イオンモールつがる柏駐車場場で新田火まつりを開催。幻想的な雰囲気の中で馬ねぶたに火が放たれると観客からは大きな歓声が沸き、赤々と燃え上がる馬ねぶたは花火とともに夏の夜空を彩っていました。



板装犬賞
出野里獅子踊保存会



踊り犬賞
東北農政局 津軽農業水利事務所



特別賞
桑寿園



特別賞
つがる市建設業協会



01



02



03



04



05



06



07



08



09



10

01つがる市職員チーム 02西津軽
土地改良区 03航空自衛隊車力分
屯基地「馬ねぶた愛好会」 04つ
がる西友会 05蓮沼一心会 06稲
垣「藁の会」 07館岡チーム 08ブ
リティエンジェル 09喜寿来里馬
知 10劇団「夜行館」

伝統芸能を後世に継承

市内各地で保存・継承されている伝統芸能を一堂に会して披露する「つがる市伝統芸能保存フェスタ」が9月9日、森田農村環境改善センターで開催され、詰め掛けた約350人の市民らが郷土の踊りなどを楽しみました。

今回で5回目となるフェスタは、市伝統芸能保存協会（七戸博道会長）が主催。つがる市登山囃子保存会、三方荒神鹿島獅子保存会、木造甚句保存会、弥三郎節保存会、ホーハイ節保存会、出野里獅子踊保存会の6団体が出演し、鶴田町の二戸平二さんによる津軽伝統人形芝居・鶴亀一座が特別出演しました。

つがる市登山囃子保存会



毎年、旧暦の8月1日に五穀豊穡と家内安全を祈願して行われる津軽地方最大の秋祭り、国の重要無形民俗文化財に指定されている伝統行事の「お山参詣」のお囃子である。

「お山参詣」の初日は「向山（むかいやま）」と呼ばれ、津軽各地より大勢の人々が岩木山神社に集まり、参道を上ってお参りをする。翌日の「宵山（よいやま）」では、黄金色の御幣（ごへい）や色鮮やかな幟（のぼり）を掲げ、白装束に身をかためた参拝者が、登山囃子が響くなか「サイギサイギ」というお題目を唱えながら、岩木山神社を目指す。

最終日である旧暦8月1日の「朔日山（ついたちやま）」には、岩木山山頂でのご来光を拝むために参拝者は未明に出発し、ご来光を拝した後は、無事に終えたことを岩木山神社に報告し、下山囃子に合わせて踊りながら帰途に着くのである。

三方荒神鹿島獅子保存会



今より200年以上も前に、鹿島神社がお授けになり、鹿島様の前でお神楽をやったというのが始まりと言われている。

内容は、鹿と案内する猿が奥山から降りてきて、川に橋を架けて渡り、森に上がって、お宮に参拝して、神社の庭でお神楽をやるという構成になっている。このような貴重な郷土芸能である獅子舞も戦争を境に50年もの間途絶えていたが、昭和49年に育成小学校の当時の平間ヌエ教頭が復活に奔走され、昭和53年に育成小学校にクラブ活動として獅子舞クラブを結成、昭和60年から現在の形となり、その獅子舞の伝統を受け継いでいる。

木造甚句保存会



この唄は、名君と称される4代藩主・津軽信政公が新田開発の拠点として設けた代官所や御飯屋において、二十日盆の時に、松の木の下に陣取った殿様の前で、地元の人々が唄い踊って見せたのが始まりと言われている。

（歌 詞）

- 一、木造良いとこ お米の出とこ 味も良いのも ノー 日本一よ
- 二、木造生まれて 色こそ白い 嫁もらうなら ノー 木造娘
- 三、木造白井の 支那そばよりも 私あね娘の ノー そばが好き
- 四、鯉ヶ沢朝顔 木造牡丹 それに五所川原 ノー 百合の花
- 五、俺の裏庭の なんばの花コ 白く咲いても ノー 赤くなる
- 六、おまえ死んでも お寺にやらぬ 焼いても焦がして ノー 灰で飲む
- 七、月よ夜鳥 世にほれて泣く 私貴方に ノー ほれて泣く
- 八、長く咲く花 クルミの花コ 末を案じて ノー 丸くなる



弥三郎節保存会

弥三郎節は、嫁いびりの内容をもった数え唄形式の唄ということで、全国的にも非常に有名な民謡である。今から約200年前の文化5年、旧森田村の下相野の百姓 弥三郎の所に、隣村大開（おおびらき）の百姓 万九郎の娘が嫁にいましたが、弥三郎の親の嫁いびりに耐え切れず、ついに離縁することになり、その別れの時、外に放り出された長持に腰をかけて、思い余って嫁が恨みをこめて唄ったのが、この弥三郎節の由来とも言われている。

(歌詞)

一ツエー 木造新田の下相野 村のはずれコの
弥三郎アエー ヤレア 弥三郎アエー
二ツエー 二人三人と人頼んで 大開の万九郎
から嫁もらった ヤレア 弥三郎アエー
三ツエー 三つ物揃えて貰た嫁 貰てみだご
気に合わネー ヤレア 弥三郎アエー
四ツエー 夜草朝草欠ねども おそぐ戻れば苛
(いび) られる ヤレア 弥三郎アエー
五ツエー 苛たりもいだりあざめだり 日に三
度の口つもる ヤレア 弥三郎アエー

六ツエー 無理だ親衆につかわれで 十の指コ
から血コ流す ヤレア 弥三郎アエー
七ツエー なんぼ嫁いでも働いでも つける油
コもつけさせね ヤレア 弥三郎アエー
八ツエー 弥三郎家コばり日コ照るな 藻川の
林さも日コ照ね ヤレア 弥三郎アエー
九ツエー この親だちア皆鬼だ ここさ来る
嫁アみな馬鹿だ ヤレア 弥三郎アエー
十ツエー となり知らずのボタ餅コ 嫁にかひ
ねでみなかぐす ヤレア 弥三郎アエー

この唄は、高い裏声を張り上げて唄うというきわめて特異な発声法を用いる旧森田村の盆踊り唄です。

今から430年位前の天正年間、津軽藩の祖 津軽為信が、今の青森市にある奥瀬善九郎の油川城を攻撃したが、落城かなわず退却せざるを得なかった。為信公は、兵士たちの落胆・疲労があまりに大きいため、津軽坂（今の鶴ヶ坂）の峠の茶屋「お玉茶屋」で一休みをさせることにした。その茶屋は、お玉という美人の娘と腰の曲がったお婆さんがやっており、そこで為信公が兵士たちの士気を鼓舞するために娘とお婆さんを題材に即興で唄ったのが、ホーハイ節の始まりと伝えられている。

ホーハイ節保存会



(歌詞)

婆の腰あ ホーハイホーハイホー ハイ まあがた まがた腰あのらぬ
稲の花 ホーハイホーハイホー ハイ 白いでやな 白い花みのる
りんごの花 ホーハイホーハイホー ハイ よげでやな 赤い花見事
愛宕山 ホーハイホーハイホー ハイ 高いでやな 賀田町ながい
今年雪 ホーハイホーハイホー ハイ よげいだでやな 豊年満作だ
沼の水 ホーハイホーハイホー ハイ 赤いでやな 変わったことねばいい
あね娘顔 ホーハイホーハイホー ハイ 顔赤いでやな なに恥ずかしば
お玉家コ ホーハイホーハイホー ハイ どおこだ お玉家コここだ

～ 特別出演 ～

津軽伝統人形芝居「鶴亀一座」



鶴亀一座は、手作りの人形による津軽弁の芝居の中に、民謡を取り入れていることが特徴の人形芝居。看板の鶴太郎、亀蔵の漫才は、「日本一の男良し」で始まり、イタコの口寄せ、登山囃子など二人で芸をする。

出野里獅子踊保存会



出野里獅子踊りは、江戸時代初期（1680年代）から320年以上も継承されてきた歴史ある伝統芸能で、藩政期に津軽藩から新田開発のために入植した武士たちが、五穀豊穡と家内安全を願うために出野里の人々に伝えたのが始まりである。

昭和に入り後継者不足で途絶えてしまったが、昭和60年度の出野里小学校卒業生の2年間にわたる熱心な聞き取り調査の結果、見事復活を果たした。

その後、出野里小学校で継承されてきたが、閉校に伴い、現在は「出野里獅子踊保存会」が少年組、大人組に分かれ継承活動を実施している。出野里の獅子は、獅子としては珍しく胸に津軽藩公認の紋章を付けており、鹿をかたどった三体の獅子が、猿の化身である「お可笑（かし）」に導かれながら踊りが進行する物語性に富んだドラマチックな構成内容になっている。